

## 海外文化研修に参加して

井手 陽子

海外文化研修を終えてもうすぐ4ヶ月が経とうとしている。私が海外文化研修に参加することを決めたのには二つの理由があった。まず、自分の好きなテーマを設定して研究できるということ。そしてもう一つは一人に一家族のホストファミリーがつくということであった。見ず知らず、ましてや母国語の違う人達と約3週間を一緒に過ごすのは不安もあったが、その国の文化に直接触れられるという大きなメリットを期待することができた。そして、私にとってこの研修でのホストファミリーとの出会いは生涯忘れられない大切なものとなった。

ホストファミリーとの交流は手紙のやり取りから始まった。出発の3週間前にホストファミリーが決定し、その後すぐミネソタより二通のエアメールが届いた。一通はホストマザーからのもので、かわいらしい花柄のカードと家族四人で写った写真が同封されていた。もう一通はホストシスターのお姉ちゃんからのもので、日本ではあまり見られないような派手な色使いの便箋と二匹の猫の写真が同封されていた。どちらの手紙にも私と会うことを楽し

みにしているといったような内容が書いてあり、この手紙によって、私が抱いていた不安は次第に期待へと変わっていったのであった。

13時間という長い飛行時間を経てミネソタへ到着した。到着ロビーではそれぞれの家族が私達の名前を書いたポスターを手に出迎えてくれた。私のホストファミリーは、お父さん、お母さんと妹の三人が迎えに来てくれていた。何度か手紙やメールでやり取りをしていたせいも、初めて会うはずなのに以前から知っているような気がしてすぐに打ち解けることができた。

ミネソタでの生活は毎日が大変充実していた。私のホストファミリーは私の為にたくさんのことを考えてくれていた。私達は一緒にスポーツをしたり、映画やビデオをみたり、野球を見に行ったり、と数え切れないほど多くの時間を共有した。私は家のどこにいても「陽子はどこ?」「私についてきて!」とお呼びがかり休んでいる暇などなかったくらいだ。私の家では夕食の後ベッセル大学で出た宿題を家族全員と一緒に済ますことが毎日の日課であった。この宿題は家族に様々な質問に答

えてもらうというもので、これを題材に私達は日本とアメリカとの違いをたくさん話し合った。これは私達にとって異文化を理解し合う最も良い時間であった。私の家族はこの宿題が大好きで、「陽子、今日は宿題ないの?」と毎日催促されたものだった。“我こそは”と答えようとする為、喧嘩になったり、参考になる物や写真などを家中走って探し回ったりと様々な思い出がある。なかでも特に思い出となったのはミドルネームをもらったことだ。私が不思議に思っていたことに、キリスト教の人々が持つミドルネームがあった。このミドルネームは一体どういう時に使われているのか、昔から疑問に思っていた。ホストマザーは使い方のひとつとして「母親が子供を叱る時にファーストネームとミドルネームを続けて呼ぶのよ」と教えてくれた。日本人はミドルネームを持ってないと私が羨むと彼女は私にオノというミドルネームを付けてくれた。もちろん小野陽子からきたものである。それからというものお母さんはよくふざけて私のことを「ヨウコ・オノ!」と呼んだりしたものだった。今でもメールや手紙に書いてあるのを目にすると懐かしく思う時がある。

3週間という期間は実に短く、本当にあっという間に過ぎ去ってしまった。空港で私達5人は皆、溢れ出す涙を止めることはできなかった。ホストマザーはアメリカ人のお母さんが自分の子供にするように、私をギュッと力

強く抱いてくれた。あのぬくもりは今でも私の体に残っている。

私は海外文化研修は私に、異国の文化を自分の心と体できちんと知り理解する機会を与えてくれたであろう。そしてそれだけに止まらず、同時に日本という自分の国を再認識する機会も与えてくれたと思う。実際に現地で生活するまでは海の向こうの国に大きな憧れだけが先行し、自分が現在住んでいる国でさえもきちんと理解していなかった。しかし、短い期間でさえも違う文化の人々と触れ合うことで自分の国を今までとは違う視点で見つめ直すことができたと思う。また、ホームステイという形式で滞在することによって、人と人の本当のコミュニケーションを学ぶことができたと思う。そして、私は4人のアメリカ人から家族というものについて本当に多くのことを学んだ。

日本に戻った今でも私とホストファミリーとの交流は続いている。帰国した次の日には早速ホストマザーから手紙が届いた。それにはこんなことが書かれてあった。「私のことアメリカ人のお母さんだと思っていいのよ。だって、あなたは私の日本人の娘なんだから。」この手紙は私の宝物となっている。

(いで ようこ

本学文学部日本文学科3年)